

「わたしたちの下市町」

令和3年(2021)4月1日改訂版発行

この副読本は、3・4年生の社会科の学習のたすけになるようにと下市小学校の先生たちによってつくられました。この本を手がかりにして、町の今のようすやこれまでの先人の苦労や努力などで下市町のうつりかわりを、みなさんの目や耳、手や足をはたらかせてしっかりとたしかめてください。そして、自慢できるふるさとの町として、下市を心にしっかりとどめてほしいと願います。 「あとがき」より

道路や鉄道のうつりかわり

① 舟が使われていた頃

下市町は、江戸時代から吉野地方の森林資源を商う市場町として発展し、多くの人や物が集まり行き交う「市」が立ち、日本最初の商業手形「下市札」が発行され吉野の商都として栄えました。また大峯参りの宿場町にもなっていました。

今からおよそ100年から150年前、人や物を始め、吉野地域の杉や桧を運ぶために、船や筏を利用していました。また昭和2年(1927)に洞川から下市口駅を結ぶ「索道」ができて木材や食料、生活用品が運ばれました。

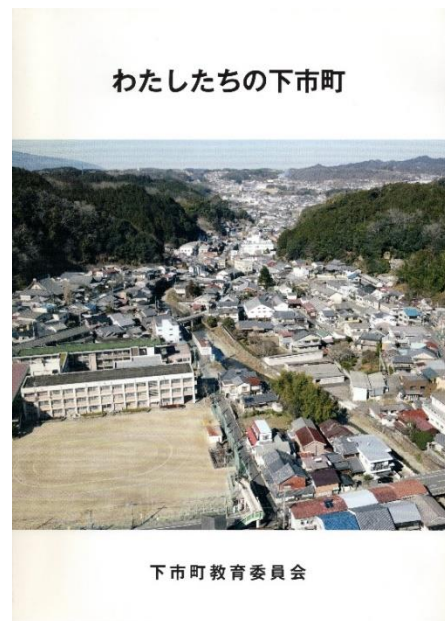
② 鉄道ができた頃の町

下市町や黒滝村・天川村の人達は、すべて千石橋を通らないと大阪方面に行くことができませんでした。下市町は吉野川をはさんで大淀町とともに道路の集中点で、南北交通の要となっていたため千石橋は早くかけられました。

明治25年(1892)には鉄が使われた立派な千石橋ができ、今から100年くらい前、昭和5年(1930)にすべて鉄でできた橋になりました。この橋を利用する人は多く、交通量もとても多かった。

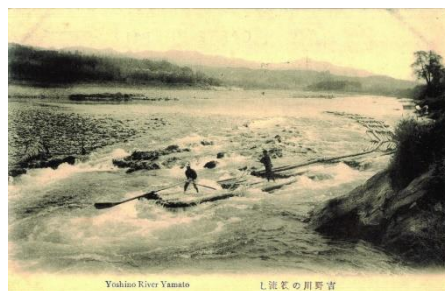


索道
(下市～洞川へ)
写真提供：成瀬匡章氏



わたしたちの下市町

下市町教育委員会



吉野川の筏

写真提供：成瀬匡章氏

千石橋の変化

写真：大和下市史

明治25年
(1892)
(木と鉄)



昭和5年
(1930)
(鉄筋)

